
悪を狩る者

影宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪を狩る者

【Nコード】

N5337V

【作者名】

影宮

【あらすじ】

年間、10万人。それは、殺人鬼によって殺された人、死へと追いやった人達による死亡者だ。それらに、怨みを持つ人達に復讐の依頼を請け負うのが、ブラッド・チェーンだ。だが、その組織には、綻があった。それは、悪人（殺人関係）以外の人を殺さないことだった。

始まりの日

家が燃えている。家族が床に倒れている。自分もまた、倒れている。ある人は、くびが無く、ある人は、両足が無かった。それらはまだまじだった。なかには、人の原型も留めていないほど、バラバラになっている人もいる。床には、家族だった者が転がっていた。それらを見るのが辛く、視線を逸らすために、天井を見た。俺は、何故か殺されなかった。腕、足、胸、腹部、様々な場所を斬られながらも、今もこうして生きている。俺は、殺人鬼の気まぐれによって助かっていた。

いや、そうではないのだろう。考えてみれば、火を放ったのは、あの殺人鬼ではないか。時間が経つにつれ、火が大きくなり、今は部屋全体を覆っている。天井も真っ赤な火に覆わていて、夜なのに昼のように、いや、昼より明るかった。

ここまで火が大きくなる前に逃げられなかったのか、だって。動けなくなるくらいの怪我を負っていて、逃げられる訳がないだろう。根性、精神論でどうにかなるくらい甘くないよ。少し動かせば、血が出て、すぐに動けなくなった。

家族の後を追うつてことも出来るが、そんなことはしない。それは、あの殺人鬼に対して負けを認めたってことだ。俺は、そんなことをする気はないし、生きることから逃げようとも思っていない。少なくとも、あの殺人鬼に復讐を果たすまでは。

そう思っている、火は勢いを増し、俺を殺そうとしている。ああ、ここで死ぬのか……。死ぬのは怖いと思っていたが、そこまで怖くはないな。ただ、復讐する前に死ぬのが、心残りだ。ただ、そんなことを考え始めている時に、ドアが開かれた。いや、蹴破られたと言った方が、正しいな。そこに黒いフードを被った1人の男がいた。

気のせいだろうか……。火が男を避けたように見えただが。そん

なことより、コイツは一体何者だ。得体の知れない相手として警戒していると、男は俺の方に向けて喋りだした。

「生存者がいる可能性はないと思っていたが、一応見に来て正解だったな」

「誰だ。お前は……」

「誰？ そうだな、名前を知らない相手は疑うよな。とりあえず俺の名は、新開 修一だ」

「その新開とやらは、何しに来たんだ」

こいつの名を知ったところで、何を考えているかわからないし、本名かもわからない。だが、悪い奴では、なさそうだ。

「たまたま通ったところに、火事があった。生存者がいるか様子を見に来ただけだ」

「で、俺をどうする気だ？」

「専門外だが、生きていた以上は助ける。しかし、田舎は大変だな。この火事に通報してくれる人がいないとは、不便だな」

「……しょうがないさ。人自体、そんなにいないから」

そうやって話している間にも、火が大きくなり、周りを囲むように包んでいく。

「……助けるとかいったが、どうする気だ？ ここまで燃え広がったら、逃げ場が無いよ」

「逃げる必要など無い。俺の後ろについて来い。そうすれば、火の方から、逃げる」

「何を、言っ……」

俺が何かを言おうとする前に、新開は炎と化した、道を行こうとしていた。あの方角は、確か新開が、ドアを蹴破った場所だったな。……そんなことを考えている場合じゃない。

「おい、ちよつと、待……。エッ!？」

止めようとしていたが、途中で言葉を失った。まるで、炎が新開を恐れているかのように、その周りから、引いていったのだ。

「おい、どうした？ 着いて来いよ」

「着いていくにも、動ける状態じゃないから！ 動けたら、火が燃え移る前に、逃げてるからな」

「フム、それもそうか。じゃ、背負っていくか」

新開が俺を背負うと、そのまま来た道を戻っていく。

「…何故、俺を助ける？ お前に助けられる、貸しも借りもない。それどころか、俺とお前は、見ず知らずの他人だぞ！？ 助ける理由が無い」

「そのまま、死にたかったのか？」

「死にたくはなかったし、助けてくれたことにも、礼は言うが、お前には、助ける理由がない」

「理由なら、それでいいだろう。死にたくなかったから、それでいいじゃない」

「たった、それだけで人を助けるのか」

それは、困っているから助けると言う、シンプルな理由。言うのは簡単だが、やる事が出来る人は、そんなにいないだろう。

「…それに、俺自身にも、負い目があるしな……」

「何か言ったか」

「いや、コツチの話だ。気にしないでくれ」

「そうか……」

始まりの日・後半

何かを言っていたかと思っていたが、本人は言っていないというなら、気のせいなんだろう。

「これから、どうする気だ？」

「どうするとは？」

「床に転がっていた死体は、家族の死体なんだろう？ 頼れる人や親戚はいるか、施設でも良いけどな？」

言葉が詰まった。頼れる人はもちろん、親戚もいない。施設などの宛ても、当然無かった。

「宛が無いのか…。なら、俺の組織に…、いや、そういう施設の場所を知っているから、その場所を紹介しよう」

言いかけた言葉を、途中で止めた。自分の所属しているところが、いかに危険で、不安定な場所かを、思い出したからだ。だが、すでに遅かった。

「お前の組織は、どんなところなんだ？」

「それよりも、施設の話をだな…」

「それは、後からでも聞ける。先にお前の組織の説明をしてくれ」
最初にうっかり口走ってしまったことを、後悔した。しかし、嘘をついて誤魔化そうとは、考えなかった。本当のことを話した後で、諦めてもらおうと思った。それに、あんな場所に入りたがる人もないだろうと、考えたからだ。

「…いいだろう。話してやろう」

それから、組織のことを語った。まず、名はブラッド・チェーンといい、殺人集団の組織だと、いうこと。悪人（殺人関係）以外の人は殺さないこと。普段は、別の仕事をしていること。当然のことながら、死と隣り合わせの仕事だということ等、いろいろと話してくれた。

「…と言っわけで、お前には、施設に行くことを進めるが、一応、考えが、あるなら聞く」

「俺は、施設に行く気は無い！」

「は？」

「俺は、ブラッド・チェーンという組織に入りたい」

「なんだと！？」

新開は驚いていた。組織に入りたいと言ってくるとは、思ってたかったからだ。だから、聞き返せずには、入られなかった。

「正気か、お前！？」

「正気さ。考えて、出した答えだ。後悔はない」

「この道は、茨の道。いつ死んでも、おかしくない」

「わかってる」

「いや、わかってない！！ まず、新人の半数以上は、一年以内に死ぬ。熟練者ですら、毎年のように消えていく場所だ。それをわかって言っているのか！？」

あの場所で消えていく人を、見つづけてきた者の、真剣な言葉だけに、重みを感じた。一瞬怯みそうになったが、新開に向かって言った。

「例え、死ぬ可能性があったって、俺には、やらなければならないことがある」

「…復讐か？ だったら、止めておけ。死んでいった者のために出来ることは、生きてゆくことだ。だから、お前がやるべきことは、それではない。」

「じゃあ、お前は何故、この道にすすんだ。答えろ」

「……………」

「答えれないのか？ それとも、俺と同じ理由か。どちらにせよ、もう決めたんだよ」

新開は黙っていた。どうするべきかを。そして、こいつの覚悟はどの程度のものなのか、実力はどうなのか。そして、試してみよう

と考えた。

「お前、名は？」

「は？」

「名前だよ。名前。無いつて訳ではないんだろう？」

唐突で何を聞かれたかわからなかったが、再度、聞かれてわかった。俺の名前を聞いているのだと。

「久那森 隼人」

「隼人と言ったな。お前に試験をしよう。組織に入る為のな」

「で、どんな内容だ？」

「簡単なことさ。俺の膝が、地面に少しでも触れたら、合格。出来なかったら、不合格。お前は、どんなことをしてもいい。制限時間は2時間。以上だ。文句は無いな」

「無いけど、いいのか。それで、お前の方が不利ではないか？」

「ハンデというのは、公平にするためにある。俺とお前なら、これくらいのハンデは必要だ」

言葉を言い終えると、ゆっくりと、構えた。そして、久那森の方に向くと、一気に走り出した。

片鱗の欠片

そのまま接近していき、隼人に蹴りを入れた。突然の攻撃で、かわすことが出来ず、地面に叩きつけられる。

「ぐあっ…」

痛みが後から、響く。いきなりの攻撃とはいえ、全く反応が、出来なかった。わかったことは、蹴りをくらって、地面にひれ伏していたことだ。

「不意打ちとは、やってくれるな」

「お前が飛び込む世界には、不意打ちぐらいざらにある。それに、卑怯な真似をしない悪人が、この世界に何人いる？　これが戦場なら、お前はすでに死んでたな」

確かに正論だ。俺が進むと決めた道は、茨の道であり修羅の道。これくらいの予測も出来なければ、命がいくらあっても足りない。ゆったりと立ち上がると、歯を食いしばりながら、向かっていく。何発か食らっても、一発を当てるといいう、考えだった。

「一発でも当たればと、考えたのだろう。だが…」

殴りかかるうとした瞬間、何十発ものパンチを受けて、数メートル飛んで、地面に倒れこむ。一体何が起きたんだ？　近づいた後、攻撃をしようとして、返り討ちにあった。一回でダメなら、もう一回だ。同じことしようとした時、新開が溜め息をつきながら言った。「お前さ、さっきと同じことしようとしているだろう。だったら、やめとけ」

「なんでだ？」

「下手な鉄砲数撃てば当たるって、知っているか？　どんなに下手くそでも撃ち続けていれば、いつかは当たるという意味だ。だが、それで当たるのは奇跡だろう。同じことをするってことは、相手に予測されてるってことだ。それが回避につながり、反撃にもつながる。だが、さっきの攻撃をするなってことではない。やるなら、ば

れないように避けられないようにしろ。どんな攻撃にしろ、相手に読まれたら負けだ。相手の予想を裏切るような行動をしろ。そうすれば勝てる」

俺の考えは甘かった。そう思わずには、いらなかった。言うことは正しかったし、なにより、相手に読まれていれば、どんな攻撃も意味が無い。それを上回る行動ができるほどの実力はない。ならば、俺に出来る範囲の行動で、どう、こいつを倒すかだ。

「おつ、武器を使うのか？ 禁止してないから別にいいけどな」

鉄パイプが置いてあったので、それを使うことにした。左手を握り締め、右手にそれを持つと、さっきと同じように突撃していった。「行動が同じだと、読まれるぞ」

ああ、ここまで同じさ。だが、さっきと同じとっているなら、そこに勝機がある。握っていた左手から、石を投げた。相手が、弾くか避けるかをして足を止めていられれば、その間に間合いをつめ、一気に叩く。だが、その考えをスグに裏切られる。

「残念だが、予想範囲だ」

投げた直後、石等気にすることなく、向かってきた。そして一気に懐に入ると、そのまま殴り飛ばされた。

「足止めのつもりなら、甘いな。それに、想定範囲の攻撃なら、対策しようがある」

なんでもいい。とにかく、新開を倒すためには、行動あるのみ。

「フットワークか。しかし、動きが粗いな」

動きが読まれ、さっきと同じように、殴り飛ばされる。

「うおおおつ！」

叫び声と共に、向かっていく。顔や体を狙わなくても、膝が地面につけば俺の勝ち。なら、足狙いで行く。足に向かってぶつかろうとしたとき、蹴り上げられた。

「足狙いに切り替えたことで、意味は無いよ」

可能性を狙って、様々なことをしたが、意味はなかった。どの攻

撃も掠りもせず、終わった。

「残り十分を切った。色々と試したけど、ダメだった。そんなにロボ口になっていては、そんなに動けないだろう。だから、諦めるんだな」

残り時間を見て、体の様子を見て、諦めることを進めてくる。残り時間も少なく、ロクに体も動かない。だが、諦めようとは思えなかった。

「まだ、諦めないのか？ いい根性してるな。だが、それは、無謀と言っものだ」

フラフラになりながらも、立ち向かっていく久那森を、容赦なく叩きのめしていた。そして、さらに時間が経過した。

「残り、一分。どう頑張っても、お前に勝ち目は無い。これで、終わりだ」

新開は断言する。確かに、もう体がロボ口で、動くことすらやっとな。意識もフラフラして、曖昧だ。

「残り十秒か」

新開が時計を見た瞬間、そのたった一瞬の行動を見逃さなかった。久那森が新開に向かって走り出す。「なっ！？」

新開は驚いていた。満身創痍でロボ口だったはずが、こんなにも動けるとは思ってなかった。ガッ。鋭い蹴りが、顔へと放たれる。とっさにガードして防ぐが、攻撃が凄まじく、数メートル後退した。

くそっ、なんて蹴りだ。数メートル後退して、ガードを解こうとした時、目の前に久那森が近づいていることに気づく。パンチを繰り出した久那森の攻撃をガードするが、力任せに地面へとねじ伏せる。地面に膝が着いた瞬間、時計のアラームがなった。そして、久

那森は組織入団を認められた瞬間だった。

模擬戦

今のは、何だったんだ？ 確かに少し油断していたかもしれない。しかし、あんなに痛めつけた相手が、あそこまでうごけるとは…。それに、今まで通りの動きなら、負けることはなかった。あの動きは、俺のタイミングを読み取って、動いたってことか？ 急に出来ることなのか。もしかするとこいつは、化けるかもしれないな。小さくそう呟いた。そんなことよりも、あの技（？）の正体が気になった。

「おい、さっきのは一体…」

喋ろうとして、気がついた。こいつ、気を失っているのか。意識を無くし、それでも俺に向かってきたのか？ お前を突き動かすものの正体は何だ。復讐？ 憎しみ？ それとも、それ以外のなものか？ 聞いても無駄だろうな…。答えてくれるとは思わないし、もしかしたら、自分でも知らないかもしれないしな。

「ふう… 仕方ないな」

めんどくさいな、と思いながらも、久那森を背負って歩き出す。向かう先は、殺人鬼の巣窟であるブラッド・チェーンという、組織のところへ。

ここは、どこだ…。白い天井に、白い壁、ベッドに寝かせられていて、殺風景を補うため、花瓶に花がそえてあった。

「おっ、もう起きてても、大丈夫なのか？」

「おかげさまでな。お前が手当てしてくれたのか？ ありがとう」

「俺はここまで運んだだけだ。手当てしたのは、組織の人達だ」

「そうなのか？ でも、お礼は言うよ。わざわざここまで運んでくれて、ありがとう」

「フンッ。後で、手当てしてくれた人にも、礼を言っとけよ」

さて、どうしたものか。あの勝負のことを聞いとくべきか、黙っ

ておくべきか。ま、本人は気づいているかは知らないが、俺に勝ったからここにしていることは、自覚はしているのかね？ 苦笑いしながらも、久那森を見ていた。

「どうした？ 何かいいことでもあるのか」

「ん？ 最後自分が、どのように勝ったか、わかっているのかと思っ
つてな」

「何！？ 俺が勝ったのか？ 新開にか…」

覚えてないのか…。まあ、無理も無い。気を失っていて、意識が無かったからな。となると、無意識に、つまりは、意識が無い状態で戦っていたことになるのか…。潜在能力はあるが、使いこなせてないってことか。

「まあ、そうなるな…。どのように勝ったかまでは言わんぞ」

「うーん、何故俺が勝ったんだ。わからん…」

本気でわかってないようだ。もし、自分の思い通りに使えば、厄介な代物になるな。他の奴の能力も気になるし、あれをやるか…。新開が携帯を取り出して、電話をする。プルルルル、プルルルル、プルルル… ガチャ

「もしもし」

「渡来か？ 訓練所を使いたい。許可をくれ」

渡来 賽。同期に入った後輩で、訓練所の管理をやっている。

「訓練所？ それなら、第4訓練所が空いているよ」

「それはありがたい。例の事で聞いておきたいのだが…」

「それは後で話すよ」

そう言つと、そのまま電話を切られた。例の事とは、久那森のこと、あの日出した。あの技(?)についてだ。それはそうと…

「隼人、第4訓練所に行くから着いて来い」

「お、おう…」

そして、訓練所へと向かった。

「誰もいないな」

「そのうち来るさ、もうすぐ放送して呼び出すさ」

しばらくすると、放送がかかった。

「えー、諜報部隊の新兵は、第4訓練所まで来てください」

「諜報部隊？」

「ああ、役割のことか？ 俺達の組織には、どの隊がどんなことをするかを決めて、動いているんだ。ま、人数不足のところは、他の隊の人を使うけどな。諜報隊の他に、どんな隊があるかと言えば、情報隊、強襲隊、防衛隊、陽動隊、煉獄隊、火葬隊、整備隊、救護隊、修復隊の10の隊で構成されている。どの隊に入るか、選択肢は個人で決められるからな。よく考えて決めろ」「どの隊がどんな役割があるかは、聞いてないんだが…」

すると、紙の束をポイツと放り投げてきた。何だコレは？

「この紙に、それぞれの役割が書いてある。その他にも、設備のこと、部屋のこと、ここでの規則等が書かれている。それをよく読んでおくことだ。あと、この紙にどこに所属したいかを、書いて提出だ」

面倒だな、と思いながらも、紙束を受け取った。一日で読むことは無理だと思っ量だな。

そんなことを考えていると、人がゾロゾロと集まってきた。放送で読んでいた、諜報隊の人達が…

「入ってから、数ヶ月の者、数週間の者、あるいは入ったなりの者、これからお前達の実力がどれだけあるのかを見るため、模擬戦を行う。武器を持って戦うか、素手で戦うかは、自由だ。30分後に始めるから、準備をするように」

模擬戦か… 素手で戦う方法は知らないし、武器でも使った方がいいだろうな。山積みの武器の中から、木刀を選んだ。当然だが、人を殺傷出来るような武器は置いてないな。そのことにひとまず安心する。

30分後、模擬戦が開始された。

「お前が入ったなりの新入りか？ 弱そうだな」

対戦相手の男が、お気楽に話しかけてきた。

「俺はココに来て、半年になる。何回か依頼をやったし、お前より先輩だ。新入りに負ける訳がない」

男は自信有りげに答えた。何回かやっているからだろうな、その自信は。それもあつたが実際は、新入りが、と舐めていたからである。

「準備が出来たようだな。では開始の合図をしよう」

審判らしき者は、新開と賽って人がやってくれるようだ。ドーン。銃の空砲が響き、それが開始の合図になった。確か勝利条件が4つあつたな。相手が負けを認めた時、続行不可能と見られる時、相手の武器が使い物にならなくなった時、相手の戦意が失った時、の4つだ。時間も三分と短いものだ。

「きいえええええっ！！」

「うおっ！？」

叫び声らしきものを上げて、勢いよく武器を振るう。相手の武器は槍で、木製仕様だ。武器は、相手の方がリーチがあつた。繰り出す攻撃も遅くは無い。むしろ、速い方に入るだろう。しかし、攻撃が単調で、パターンが少なく、何回か見れば、動きが読めた。

「ちょこまかと…」

動きが鈍つてきて、速度が落ちてきた。時間もないし、反撃するなら今しかない。隼人が動いた。最初はてこずっていたが、何回か見れば眼もなれる。相手の攻撃と同時に鋭く踏み込んだ。突きを木刀で逸らすと、相手は驚いた表情をしていた。そして懐に入ると、鋭く振り下ろした。

「ぐわあっ！？」

肩に当たると、痛みからか槍を落とした。その瞬間、相手を戦意喪失とみなしたのか、一応俺の勝ちになっていた。

それから、三十回ほどやった後、開始前までいなかった人物を見かけた。

「中々の勝率だな。24勝4敗2引。総合すればこのなかで、第6位に入る」

6位か。八十近い人達中からの順位なら、悪くはないな。そう思っている、さっきまでいなかった人が、急にコツチまで来た。

「お前、俺と戦え！」

「突然何を言っているんだ！？ 十人大将のお前が相手じゃ、勝負にならんよ」

どうやら、俺と勝負、つまり模擬戦をやれと言っているらしい。十人大将。自分より偉い人だとわかるし、明らかに格上の相手だ。雰囲気は模擬戦で戦ったどの人よりもある。

「そつえば、自己紹介がまだだったな。俺は陽動隊十人大将、我菟 音鳴。さあ、お前の力を見せてみる」

いきなり勝負を挑まれた隼人、我菟が構えろとひとこと言う、構えをとると、少し喋りだした。

「さあ、合図をならせ！」

パーンと、空砲が鳴り響き、それが合図となり、勝負が幕を上げた。

十人大将の実力

始まりの合図は鳴ると、先手必勝とばかりに、隼人は一気に駆け出した。武器は音鳴と同じで、木刀だった。音鳴は、ゆっくりと木刀を左脇に抱えると、居合いの構えで腰を沈めた。

「まずいな……」

「もう勝負は決まったかもな……」

先手必勝とばかりに、全力で突撃していたのだが、残り5メートルのところで、ただならぬ何かを感じ、何故か後ろへと飛んでしまう。ブォンツ。さっきまでいた位置に、木刀の突きが横切る。とっさに飛んでかわさなければ今は、喉にあの突きが当たっていたと思うと、ゾツとするよ。そう思いながら、ある程度の距離を、ひとまず取ることにした。

「大抵の新人はあれを避けないのだが、あれを避けるとはやるなあ……」 新開は感心して、呟いた。

「本当ね。でも、避けてばかりでは、勝てないわよ？ それに、音鳴の実力はあの程度じゃなくてよ。本当の勝負はここから……。いえ、フルボッコはここからよ」

塞はそう言い切った。実力差もあるし、勝てない理由が有るのも知っている。だが、新開は、その言葉を否定した。

「勝敗の蓋は開けて見なければわからないさ」

何か言いたそうにしていた塞だったが、黙っておくことにした。ひとまず、試合を見ることに集中するのだった。

飛び込んで、飛んで避けるかダメージを軽減するかをしていた。居合いの射程距離5メートルは、攻略不可の壁として立ちふさがった。ダメージ無視で、何度か突撃したが、1、2撃の突きか切りをくらくと、後ろへと、飛ばされ、倒れ込むだけで、意味がない。相手がカウンター待ちを得意にしているなら、わざわざ飛び込

む必要はないな。ダメージが蓄積していることもあり、後ろへと下がることにした。相手の方が先に手を出せば、なんとかなるかもしれないし、大人しくしてるなら、少し休もうくらいに思っていた。だが、隼人は気づいてなかった。音鳴の居合いの最大射程距離に。約20メートルほど下がって、様子を見ることにした。音鳴はゆっくりと木刀を構えだした。腰を今までより低く沈めるている。バネを使つて距離を伸ばすのか？ そんなことって、ありえるのか！？疑問に思っていたことが、まさか本当になるとは思わなかった。誰が20メートル先の相手に居合いがくと思う。それも3回。

「気をつける。居合い三弾がくるぞ」

その声が聞こえた瞬間には、3回分の居合いを喰らっていた。頭、喉、鳩尾等、急所を狙ってきて打ってきた。油断していたからか、それを全部貰ってしまった。

どうする。どうしたらいいんだ。全部の攻撃を貰い、なんとか踏みとどまった。

「ほおう、あれを受けて、まだ倒れないか。打たれ強い奴だな」

音鳴は、過大評価も過小評価もせず言った。

「ま、早いとこ負けを認めた方がいいぜ。これ以上は勝負にならない。俺一方的な攻撃にしかないからな」

その言葉は正しいと言えるだろう。仮にも、1人前の暗殺者としてのランクを持つているだけはある。だが、音鳴は一つ勘違いをしていた。それは、隼人の実力はこんなものだろうと決めつけていたことだ。

「なあ、そろそろ負けを認めろよ……」

ハアハア、と肩で息をしてる隼人に声を掛けていた。あの後は勝負にすらならず、一方的な展開になる。向かっていって、居合いの餌食となり、何も出来ずにいた。今は立っているの、精一杯

な様に見えた。

「……。忠告はした。聞こえてないのか聞こえるが負けを認める気がないのかは知らんが、そろそろ終わりにしよう」

ダッ、一気に距離を詰め、木刀を上に向けて振るった。上段構えとかいう剣道の構えで。避ける気がないのか、それとも意識が朦朧としているからか、避けずに立っている。だから、次の行動には見ている者も相対してる本人すら驚いていた。「なっ……!？」

ブンッ。本人が空を切り、狙いから外れる。当たると思われる位置から紙一重に避けたのだ。「こいつは驚いたよ」

新開は感心しながら言った。

「さっきまでの雑な回避じゃない……!? 自然体でいて、全く力がいらぬ効率の良い避け方よ。偶然? それとも、これが本当の……」

塞もまた、今までの動きと違つと驚いてはいたが、避けてるだけでは勝てないと正論を出していた。

「まあ見てろ。ここからが面白くなるところだ」 楽しそうに新開は呟く。今から起こる出来事を期待するかの様に……

「いい加減、眠つてろ!!」

声を荒げて音鳴は吼える。その理由は無理もない。さっきから、全部の攻撃が避けられている。上段斬りも突きも得意の居合いさえも、その全てが紙一重で当たらずにいるのだ。

「これでくたばりやがれええ!!」

これはマズイと、さすがの新開も気づく。相手はイラついており、それが限界になったので例の技を出そうとしていたからだ。居合い連舞。居合いの技では最大級の威力と実戦性を備えた必殺技。一度、鞘にしまう必要があるが、引き抜かれたら最後。嵐の如き斬撃が繰り広げられる。スピードはまるで、銃弾の如き速さ。この技を編み出した達人は、最大千回の斬撃を繰り出したと言われている。音鳴は百に満たないが、それでも、充分すぎる威力はあるのだ。同

じ刀でも、この技を十回喰らえば折れると言われるくらいだからな。だから、止めに入ろうとしたが、間に合わない。この技を知る誰もが、終わったなと思った。この場合の終わったは、死んだなと言う意味でもある。なにせ、木刀であっても、死ぬ可能性が高い技だからだ。だが、その心配は無かった。その技が放たれ無かったからだ。「なっ、なんだとおお!？」

技を放つ前に、一度鞘にしまう必要があるのだ。音鳴は達人級まではいってないので、隙を少なくする為に一度下がるのだ。距離は二十メートルぐらい下がり、鞘にしまうと、引き抜いて技を放とうと考えた。だが、それより速く動き、柄を押さえた為、技が出せなくなっただけで訳が。

「あの新人が使った技は鳶穿ね」

「鳶穿? どういう技なんだ」

「いえ、それに近い系統かそれなのかは知らないけど、本来は臓器や眼球等を素手で筆記取る技。忍術の類のね」

「もし、使いこなせるようになったら、かなりの強者になるな。あいつは」

さて、技を出そうと、鞘を握り、柄を握って技を出せなくなった音鳴、片手で柄を押さえている隼人。どっちが有利かは、もうわかっただろう。「その手を離しやがれ」「……離しますよ。そちらを倒した後で」

ガッ! 柄を押さえていない左手で思いつき殴った。一発では倒れなかったので、何度も殴る。ガッ、ゴッ、ドカツ。殴って蹴った。音鳴が逃げるより先に、蹴りを繰り出すより先に、ひたすら蹴って殴った。

しばらくすると、崩れるように音鳴は倒れる。模擬戦とはいえ、自分より上のランクを倒したのだった。

「結構強いみたいだな。あいつと戦うのは面白そうだな」

この試合を遠くから傍観していた誰かがそう呟いた。数日後、

隼人はその誰かと戦うこととなる。

最初の任務（ファーストミッション）

「ぐはあっ……」

とある訓練所。そこには何十人もの新人がきていて、訓練に励んでいた。いや、訓練になってなかった。相手があまりにも、強すぎたからだ。

「おらーっ、もっと俺を楽しませろよ。今年の新人は、骨が無いな」
そいつは、相手が新人であるにも関わらず、手加減せずに、……手加減はしているが、相手へのことを考えるなら、もう少し手加減するべきだろう。けど、加減しなければ今度は、冷たくなって床に倒れていることになったのは、言うまでも無かった。

「少しは、新人に気を使えよ。ま、怪我人や不適合者を出してないだけマシか……」

その訓練所に、入ってきた一人の男を見た。

「防衛隊のバンデルか。俺は戦いたいんだよ。血で血を洗うような、激しい戦いをな。こんな雑魚共では、物足りんよ。そうだ、バンデル、俺と死合え」

「ブレンダンと呼んでくれ。バンデルという名字は、あまり好きじゃない。それに、お前と死合うなんて、冗談ではない。俺かお前のどっちかが、死にかねない」

ブレンダンは両手をあげて首を振る。この意味は、こんな馬鹿げたことをする気はないよ、の意味だ。

「フン、腰抜けが……。お前となら、死闘になると思ったんだが、殺る気が無ければ意味がない。とっと、失せろ」

ハア、と溜め息をつきながら言う。

「仲間内での殺し合いは、一部の例外を除けば、禁止されている。そうでなくても、仲間同士の殺し合い程、馬鹿らしいことはないがな」

ブレンダンの言っていることはあっているし、その通りの

結論と言える。しかし、この男は何かと問題を起こしていた。特に、こういった模擬戦に。

「まあいいさ。ちょうど面白そうな新人を見つけたしな」

男は楽しそうに笑う。ニヤツと。見る人が見れば、寒気をする笑いだっただ。 「どこの新人を注目しとるかは知らんが、何事も無ければいいんだがな…」

何事かあつてからじゃ遅いし、あの口振りからすると、何かを仕出かす可能性が高い。ブレンダンは溜め息をつきながら呟いた。

「何もなく、平和でありますように…」

それは、あの男が何もしないでくれ、と言う意味を込めたものだった。

その頃、隼人達は。

「そろそろ決まったかい？」

「ああ、一応決まったが…」

何が決まったと聞いているのは、所属する隊の話だ。強襲や諜報といったメイン的位置に対する主力隊に、黒翼、鋼鎖といった準主力隊がある。それらを含めると、その数は30以上はある。数ある隊から、どれを選ぶかは、本人の希望で決める時が多い（例外以外）。

「諜報に入りたいと考えています」

「何故だ？ 強襲、遊撃の次に危険な隊だとわかってるのか？」

このことは嘘ではない。新人が死にやすい隊には、毎年5指に入り、実に危険性に富んだところと言えるのだ。過去には、死亡率一位にまで輝いている。

「わかってる。危険を承知のうえで、入ろうと思った」

「……それは、復讐の為か？ なら、言わねばならないことがある」

「いや、復讐の為ではない。家族を皆殺しにした奴を殺したいだけ

だ。言わなければならないことが、止めとけなら、聞くきはないよ」
「世間では、それを復讐というのだから。いや、止める気はない
だが、2つは言わせてもらおう。まず、今のお前ではかてない。わか
るな」

隼人は黙っていた。そのことに関しては理解しているのだろう。

「次に、お前の家族を殺した奴がわかった。とても危険な奴だ」

正体がわかったといわれ、隼人の顔は、驚き半分怒り半分とい
ったような顔をしている。驚きは、この組織の情報力と犯人の特定。
怒りは、殺された家族のことだと、予想がつくだろう。

「何者かわかるのか？」　　そういったことを聞いてくるのは、普
通だろう。有名で言えば、半数以上の人は知っているかも知れない
人物だった。

「殺戮たる芸術家。別名：キラーアート」

隼人は驚愕した。世間で騒がれてる殺人鬼で、殺した人の数は
合計すると、一万人以上と言われる稀代の殺人鬼だ。

そう言われる由縁は、殺し方の豊富さ、殺し終わった後で、そ
の光景を絵に書いたりしていた。絵を書くのは、その日の気分とか
殺しに芸術性を感じた時とか言われており、毎回書いている訳では
ない。

この殺人鬼は、5年前に現れ、今も捕まっていない。そして、
この殺人鬼には、一部のファンが出来たり、漫画のモデルになった
こともあるくらい有名だった。

「特定出来た理由に、これが落ちてた」

そう言って一枚の絵を見せる。途中まで絵が書いてあるが、駄
作と見なしてか、一部が赤く消されている。多分、血で消したのだ
ろう。血で消されてないところには、あの惨劇の一部が写っている。
「年間、千単位の人を殺してる奴だ。今戦っても勝てない。しかし、
月日が経てば、勝てるかも知れない。それはお前次第だ。隼人」

今、こんな化け物クラスと戦っても、数秒と持たないだろう。
新開の言うことはもつともだ。

「そのことがわかったなら、まずは死なないようにしろ。明日は、最初の仕事だからな」

「どういう内容ですか？」

気になるのか、仕事のことを聞いてきた。新開は、少し黙った後、喋った。

「……オー・フォックスって組織を知ってるか？」「いえ……」

「オー・フォックス。元は、集団スリや泥棒をやってた組織だが、最近は殺人にまで手を伸ばした連中だ。死者の数も3〜4百人でてる。依頼人及び、ボスも、この組織を滅せよとのことだ」

少し疑問点があった。何故、ここまで被害が出てからやるのか、そのことが気になった。

「一つ質問していいか？」

「いいぞ」

「どうして、最初に被害が出た時、その組織の抹消行為を取らなかった」 そう考えるのは当然の疑問であり、自然なことだった。

最初に手を打てば、ここまでの被害は防げたからだ。

「……それには理由がある」

新開は、歯切れ悪く応える。

「まず、依頼人がいなかったこと。次に、被害が表面化しないと、動きにくいこと。そして、組織規模が大きい為、ある程度の犠牲者が必要になること。これが理由だ」

「何故、表面化しないと動きにくい。組織規模で犠牲者数を決めて動く理由はなんだ？」

普通に考えれば、少し矛盾していることだったし、そう思う人は多いだろう。

「表面化しないと動けないのは、こいつが悪だ、と多くの人に思わせねばならないからだ。表面化しなければ、あの組織は泥棒、スリをするぐらいの認識しかない。他の国は知らないが、日本でスリや泥棒で人を殺せないし、殺したらどうなると思う？」

いいたいことは、大体理解出来た。つまり、殺人にまでいつて

ない人を殺せば、やりすぎだという人は多いだろう。それに、過激派として目をつける連中が現れる可能性もある。

「…次の話をしよう。組織規模で決まると言うのは、皆殺しをするには、何人で何人からと、決めておく必要があったからだ」　つまり、組織の大きさによつて、上限を決めているという話だった。そのことに關して、また疑問点が浮かぶ。

「ちよつと待て。組織を壊滅させる前に、人殺した奴を殺したりは、しないのか？」

組織規模で規定を出すのはわかったが、規定を満たす前に、そういつた殺人に手を染めた奴の処分はどうするのだろうという話。

「条件を満たすまでは、基本的に放置。というか、ある程度のランクになれば、自己判断で決められる」

つまりそういうことか。上の者は、自己判断にまかせ、下の者は、上の者の命令があるまでは動けない。と言うことか…。

「ま、その辺は複雑なところだ。組織ならではの、長所があれば短所もあるってことよ。俺の考えを言えば、疑わしい者は、先に討て最初の被害は、次の被害の種火ってな。」

新開は、ため息混じりにそう呟いた。その表情には、組織に關する不満が見えたような気がした。

「ま、暗い話は置いてといてだな…。お前には、明日の任務前に渡す物がある」「渡す物？」

隼人は、それが何なのかわからないようだった。

「武器だよ。それとも素手で戦うかい？」

そのことを察したらしい新開は、そう言った。「武器か…

どんな武器だ？　飛び道具じゃないってことは、刀か槍とかか？」

どんな武器かわらないからか、そんなことを聞いてくる。飛び道具を使えない。そう考えれば、普通に刀か槍にたどり着くだろう。しかし、次に言ったことは意外なことだった。

「違うな。武器が配布されると思っているなら、それは違う」

「どういうことだ？」

武器を渡して戦えって意味ならわかる。だが、それが違つとなつたら、どういう意味になるという話になる。

「いや、武器を渡す手助けをしているのだよ。人が武器を選ぶのではなく、武器が人を選ぶのだよ」

「武器が人を選ぶだと!？」

「英雄とか一騎当千の将とか、それと比べると少しパツとしない達人呼ばれる人達は、武器の扱いが上手い。それは当然だ。それ以上に、武器に選ばれし者が使うからが、故にそうなるもの考える」

つまり、武器の扱いに長けた者は、選ばれし者が使っているからだと、言いたいらしい。

「ま、言うべきことはいったし、これでおしまい。もう少し話してもいいが、ちよつとした用事があるんでね」

そう言つて新開は、来た道を戻つていった。用事と言うのは、仕事絡みのことだと思つたのだろう。

「あつ、そうだ」

何か言い忘れてたように声を発し、くるりと振り返つた。

「お前が昨日寝てた部屋、引き続き使つていいぞ。今のところはな」

「何もすることないし、そろそろ戻るか…」

もつとも、戻つたところで、部屋には何も無い訳だが…。変にうるついで迷子になるのは、笑えない話だ。

「明日か…」

寝るには少し早いが、起きててもすることがないので寝ることにした。そして、そのまま眠りにつくのだつた。

「ぐふっ」

心地よく眠っていた隼人に突然、何かの衝撃が走つた。

謎

の衝撃で目が覚める。隼人の視界には、人がたっていた。

「やっと起きましたか」　どこか呆れたような声が聞こえた。隼人の口から手が引き抜かれる。さっきの衝撃は、口に手を突っ込まれたことだったことを理解した。

「……めずらしい起こしかただな。流行っているのか」

もともと、こんなものが流行るのは、嫌だが…。

「このようなやり方で起こすのは、あなたで2人目です」

あ、もう1人いるんだ、と思った。とりあえず視線が冷たい。

こっぴどいのを、冷淡な視線って奴かな。ひとまず挨拶を試みる。

「えっと、おはよう」

「おはようではありません。もうとつくに、時間が過ぎてます」

時間と言うのは、新開が来いと言ってたことか。それにしても……。

おそらく身長は170はあるだろう。隼人の身長は175あるのだが、それより少し小さい程度だ。年齢で言えば、隼人より二三つほど上に見えた。

容姿をみれば美人なのだが、硬質の美貌よりも感情の乏しさ、愛想のなさを印象づけられる、そんな女性だ。

頭は銀髪のアートヘアで腰まである。見つめられると底冷えしそうな碧い双眸。

だが、一番目を引くのは…、長身ながらバランスのとれた姿態に、そのすらりとした身体ににあわないほどの豊満な胸。服を内側から押し上げて二つのふくらみを、凝視してしまった隼人に、女性はポケットからナイフを取り出して冷たい言葉をなげた。

「これを口に突っ込めば、しっかり目が覚めるでしょう」

「…すまない」

気まづくなり、謝った。あのままだったら間違いなく、口にナイフを突き入れられていただろう。

「謝る暇があるなら、さっさと準備をしなさい。そのだらしない顔を洗いなさい。その寝癖も直しなさい。というか、時間前には起き

て、集まっておくようにすべきでは？」

口を開けばダメ出しの嵐。声もどこか冷ややかだ。

「そんなにだらしなないか？」

「殺意を覚える程度には。喋る暇があるなら、身だしなみを整えてからにしないさい」

そう言われて、黙々と身だしなみを整える。どうやらこの女性に嫌われているようだ。

「そう言えば自己紹介がまだだったな。俺はー」「言わなくてもわかります。久那森隼人であつてる筈だと思いますが」

「ま、まあ、そうだが…」

名前を言った覚えはないし、この人とは初対面なのだが名前を知っているようだ。その女性は振り返りもせず、名前を言った。拒絶するような冷酷な声で。

「私の名は、シルフィー・リーシャ。覚えてもらう必要もありません。あなたはもうすぐ、死ぬのですから」

俺が何かしたかと言いたくなるほど、リーシャからの印象が酷かった。遠回しに、死ねとまで言われた。

しばらく歩くと、ある部屋の前で止まる。その部屋のドアは他とは違い、装飾がほどこしてあった。そのドアをノックし「入れ」の一言をもらうと、お辞儀をして入った。「よ、遅かったじゃないか。少しばかり待ったよ」

そう言つて、サツと後ろに何かを隠した。一瞬だったけど、マンガに見えたような…。

「待っている間にも、仕事をしたらどうですか？ 仮にも、この東北においての諜報隊全ての指揮を受け持つ総指揮官ならば、なおのことです。マンガを読んでいては、部下に示しがつきません」

そう言つて新開に近づくと、手を突き出す。新開はそれを名残惜しそうに、ポンと差し出した。差し出された本には、読んでわかる釣りマンガ？と書かれていた。

「…本を読むのはたまになら許します。しかし、良く読んでおられるようですね。この前、部下からマンガを借りていたと聞いてますが」

新開の顔には悪事がバレたという顔ではなく、読んで何が悪いと聞きなおっているかのように思えた。

「わかってないな。マンガ、ラノベ、アニメ、これらは、日本を代表すべきモノだぞ。日本人なら読まない手はない。言っちゃ悪いが、日本だけだぞ。こんなに種類があるのは」

力説をするも、リーシャはそういうことには興味がないのか、その話はそのままスルーされる。「それよりも、隼人の用事をサッサと終わらせてください」

「ああ、そうだったな」 忘れていたのか、今思い出したかのようにつに言った。

「隼人は新人だ。つまり、武器を持ってない。言いたいことがわかるな。リーシャ。」

「はい。創世輪廻の間ですね」

創世輪廻の間？ 聞いたことの無い名前に疑問を浮かべる。貰った紙にも書いてない場所だ。

「わからないようだな」 そう問われ、コクリと頷く。

「創世輪廻の間。そこは武器を蘇らせるといわれる場所。今でも残っている武器から、今ではない武器、それに有名な武器までと様々だ。どんな武器を手にするかによって、今後が決まると言っただけではない。さあ、行ってこい。任務の話はその後だ」

「ここが、創世輪廻のといわれる場所です」

リーシャは淡々と答える。その場所は、荒れた荒野に、剣や槍が何千本と刺さっていたり、折れていたりにしていた。武器の墓場みたいなどこだ。 使えそうなモノがないように思えたが、刺さっている剣を一本抜いてみる。根本からボロっととれて、使いモノにならなかった。

「ここにある武器は全て使えないと思うんだが…」

そういう隼人に新開はこうアドバイスをする。「目に見える情報で捉えるな。武器の声を聞け。そうすれば手に入る」

武器の声？ 疑問に思いながらも、眼を閉じ、集中した。全精神を傾けながら。

自分で想像したのか、頭には剣が浮かんだ。そして、誰かが俺に問う。誰かが言った。誰の為戦うのかと。誰かが言った。何を求めるのかと。そして、問われた。汝の名はと。

隼人は考える。本当に思っていることを。あの時は復讐ばかりを考えていた。でも、それは違うと思った。別の答えを見つけたからだ。

「戦うのは自分の為。求めるのは誰もが笑える平和な日常。名は久那森隼人」

問われたことを言い終わると、謎の誰かが言う。我の名を呼べ。我の名は――。

「来い！ 風絶乱舞・銀閃――！」

手を振りかざして名を叫ぶ。その手には、気づけば刀が握られていた。「こ、これが、俺の刀……」

新開はニヤニヤしている。

「良い剣を手に入れたな。それでは任務内容を説明するか。今から三時間後、車に乗って組織に襲撃をかける。隼人達は、第三出口で待機してる。人数は58人。お前ら新人が40人。上等兵10人。兵長4人。少隊長2人。そして、特別に俺ら、諜報隊総指揮官と諜報隊準総指揮官のリーシャも同意しよう」

新開の言葉にリーシャは驚いて、眼を見開いている。

「ちょっと待ってください。この任務のランクをわかってますか？」
「わかってるよ。最も扱いやすいランクの一つ上つてところだ」

ランクというのは難易度を示している。一番簡単と言われるランクは、東北ではEだった。この任務はつまり、Dを示していた。

「このような任務にわざわざ足を運ぶ必要はありません！ 比較

的簡単な任務です」

実際、高位の者ほど難しい任務をするのだが、簡単な任務をするなどとはいわれてない。だが、大概はやらないのが主流だった。

「ま、特務もないし、相手の人数も600人だからな。ちよつとした手助けをしても、問題ないだろう。リーシャ。行くのが嫌なら俺だけでいいこう」

リーシャは少し不機嫌だったが、結局この任務についていくのだった。隼人は10倍以上の敵に不安を感じずにはいられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5337v/>

悪を狩る者

2011年11月13日10時35分発行